

身に必を我々を此火の中より救ねばならず「工學士」諾、余必をへし、我々の  
 國より此火を撲滅することを能はざれば唯た之を避く走するより外あらざ「余は  
 叫へり」歩して殿「潘矩」否を我々の家を舉げて「馬格兒」シテ貴下、尉官を奈何」  
 潘矩「我々の渠等を奈何ともせむをべからず若し幸にして渠等が今まコ、に歸  
 り来るにあらすば我々の渠等を合せて發足せざるを得ず」萬妻「我々の決して渠  
 等を棄つべからず」潘矩「萬妻よ兎に角余をして此車を火の届かざる所に避け  
 しをよ、然る後我々の又た往て渠等を索むることを得べきあり」佐官「工學士の  
 言ふ所の正しき争ひうねうねと之を領けり潘矩「叫へり」萬妻「直ち御身  
 の機關に往けよ可即直ち御身は爐に往けよ、我々の十分間の内に必ずコ、を  
 去らねばならず、善く氣をつけよ」  
 人々の皆直ちに各自の持場に起り来た幾くならせして黒煙の象の鼻より  
 湧まき起りつ降り注ぐ雨を事ともせを團々として高く立ち騰れり佐官萬妻潘矩  
 及び余は林を焼れ来る火の勢をナガめつ、後方なる露臺の上に止まり立てり看  
 むるせば亭々盡立せる衆喬木が相續て燄の中は仆れつ其の茂れる枝々の燃ゆる

岸に驟然として百銃を連發する如く常に響を斷たず燄の枝より枝に傳りりて早  
 や左右に廣く燃え延びたり  
 五分間のうち火勢は既五十五ヤルド(約を半丁)を進み烈しく吹き捲く風のだ  
 めに激せられたる燄は高く空に沖りく處々電光と相響めり  
 潘矩「我々の最早五分間を過ぎざるうち一足を舉げねばならず」余は應ぜり「此  
 の背後より逐ひ来る火勢に後れざる速力を以て」潘矩「否を我々の更らに迅疾な  
 る速力をもて走るべし」佐官萬妻「若し幸に布度等の一行さへ歸り来らむに」  
 潘矩「漁笛を鳴らせよ、漁笛、漁笛、渠等の定めて漁笛の聲を聞き得べし」  
 斯く云ひすて、渠の象背なる寶塔の中に入りたるが忽ちにして漁笛の劉頭とし  
 くサシモノ響く雷鳴を壓しく高く響きたり  
 此時の我々の情況は余がコ、に記さむよりも諸君能く自ら之を想像することを得  
 得べし我々は直ちにコ、を逃れ走らざるべからず同時に又た尉官等の一行を棄  
 つべからず  
 潘矩は我々の立てる所を歸り来れり此時火の先鋒は既我々の家を去ること五

十ヤルド以内の所に逼り空氣の著しく熱し来りて我々の殆ど呼吸に苦しむ  
 ばかり早や火花は黙々として車の上を注ぎ来り去乍ら幸として雨のため濕  
 ひをれば之が爲め燃え起るべき憂はあらを然れども彼の隙が直ち一コ、ふ至  
 るに及びて雨の力をもて拒ぐべうしざるの言ふもさらなり  
 漁笛の聲は常一高く叫べども布度甫格まゝ吳彌一個の現はれ来るものもあらむ  
 芻透は潘矩のホトリを来りて「貴下蒸氣は既一騰上せり」潘矩「好し、直ち一進行  
 すべし然れども姑らく速力を甚急母するをかれ唯だ火に追及されざるだけ一走  
 すべきあり」萬妻は傍より叫び出だせり「待て潘矩、唯だ二三分間待て」潘矩は顧  
 みて「然らば佐官只だ三分間を待つべきあり去乍ら今ま三分間せば我々の車の  
 背後に燃えおむべし」  
 早や二分間を過ぎたり最早や露臺一立ちをる能はず鉄材を用ひたる所の皆を熱  
 し来りて相觸る可らざるは勿論其の相繋る節々の熱の爲めに弛み解けむとす  
 るに至れり是に至りて猶遲々するは幾ど狂人の所爲なり  
 潘矩は高く叫べり「芻透、進行」と同時に佐官は忽ち叫ばれり「カシコ、渠

等が、多謝、多謝  
 道の右手より尉官布度及び甫格は俱一吳彌を横さまし昇きて現へを来りたり佐  
 官「とは死せるある歟」尉官「否を唯だ電氣に撃たれて其の左脛と麻痺されしな  
 り」と云ひつ、工學士に向ひ「我々は、潘矩、御身が漁笛を鳴らす聲をタヨりにせ  
 るよあらされバゴ、一歸り来ること能はざりしなり」潘矩は唯だ叫べり「速るよ  
 内に、内に」  
 布度及び甫格は直ちに車を飛ひ登れり殆ど知覺を失ひたる吳彌は其の寢室に昇  
 きゆきて安臥せしめり  
 是れ正さに十時半なり先潘矩及び芻透へ直ち舟寶塔の中へ入り象の怒ち足を  
 舉げて三様の明光の灼然として交も煙やく裡を潤歩し進みはしめり、即ち林を  
 焼き来る火の光、象の兩眼に設きたる電氣燈の光、又た空に閃過する電氣の光  
 布度は詞短く其の出でゆなる間の次第を語りたり蓋し己等は出でゆたて過く林  
 中を索めたれとも野獸の足跡にだも逢はを其のうちアラシは將さよ来らむと  
 し黑暗の色は己等の想へるよりも急に掩ひ至れるにぞ世はしく家に歸らむとす

る。早や第一群の雷鳴を聞く。及べり此時已等は家を去ること三英里（一里強）の所。在りしあり行くこと未だ幾ばくならせして已等は全く道を失ひて遂にイツコにむかひ進むべきを知らざるに至りたり。

斯くてアラシは益々烈しくあり。ササマトくなり。来れり我々の放ちたる電氣燈の光は猶ほ速くして其のホトリに達する能はず。已等はイツコにむかふべきを知らせして。只だ彷徨するうち雨は霰を挟みみて。擲つ如く降り来れるに。暫くカタへある茂樹の下に立ち寄りて之を避けぬ。

閃然たる一條の電光眼を撃つとも。一群の雷鳴耳邊に破裂せるが同時。吳彌は卒然布度の足の上で倒れか、れり之を檢する。渠が手にせる銃身はイツコに往けるや見えを唯だ木製の臺ジリのみ残りをれり。蓋し電氣は吳彌の手でせる銃身を奪ひ去りしなり。布度及び甫格は吳彌は定めて撃ち殺されしならむと思ひたり。去乍ら熱視する。幸よして電氣は直ちに渠を撃たざりしと見え。唯だ其の左脛の麻痺されしのみ斯くて。吳彌は纒か其命を全くしされども。一步も移すこと能はず。渠は頻りに尉官主従に勸めて己れを捨てコを逃れ走るべし。逃れ走りて身を

を全くせる後若し幸ふ来ることを得ば。来りて己れと昇り去りくるべしと説けり。然れども尉官主従は争て此説を聽くべからず。渠等は兩個して吳彌を昇り免角。林中をタドリゆきしあり。

斯くて二時間といへるものは。渠等は些し目アテをも得ずして。唯だ或は躊躇し或は佇立し或は又た更ら進行しつ空しく林中を彷徨せるなり。

斯るうち終りし渠等の無限の喜びも。渠等が瀟笛の聲を聞きたり斯くて其の方向を得たりしかば。十五分間を出でせして前記せる如く我々が將き一發足せむとする其トタンに恰も歸り着くを得たりしなり。

今まや我々の車は廣く平かある林間の道を追て疾走せり去れども。風勢は稍や變じ来りて是までの如く横さまは掃はむ。只だ吹きあげ吹たまくる勢とされる。其其火の燃え進む勢を助くることは益々烈しくして。酸は我々を追ふことは益々急になり来り熱灰は濁まきて地上より高く空に奔騰しつ。宛から噴火山の口を望むに似たり。潘矩の斯くと見るより更ら一速力を増して疾走したるが路上の泥濘動もをきは輪齒と没して進行を阻むにぞ。察は工學士の思ふ如く疾走すること

能い

十一時半の北に復たも一發迅絶の雷鳴頭上より落ち来れり我々の一齊一聲を失して叫びたり我々の寶塔の中在る藩短及び芻透の皆之が爲めに撃たれしならむと恐れしなり

然れども幸にして此の危難は我々の間より落ち唯だ我々の象が其右の耳を掠めて傷つけられしのみ機關の幸にして些しの損害をも蒙らむ象は依然として劉頭たる瀟笛の聲を放ちつゝ疾走せり布度の叫べり「ハルラー若し生血あり生肉ある象あらしめむ母の斯るとき直ち倒れて再び用を爲さるべし唯だ吾が此の神象の雷火電光些しも恐るゝ所なきあり快快」

佐官萬妻布度及び余の露臺の上に立ちて共に過ぎゆく所をながめをりしが我々の電光と火光とによりて路傍に幾多の巨大の黒影あるを認むることを得たり我々の幾ばくもあつて直ちに發見せり是れ皆を虎はけめ其他の猛獸にてありしあり布度は常其銃を擬して眼を左右に注げり是れ或は是等の猛獸が畏怖の餘り其の遁處を求めむとて我々の車に近づくこともあらむを慮ばかりたればなり

現に一頭の虎あり實に倏然として我々の車を目ざし飛び来らむとせるなり去れども渠が急み躍りたつ勢は渠は其の前方なるバンヤン樹の二條の枝の間より自ら其額を突き入れて進むことも能いを退くことも亦た能いを唯だ苦しげに呻吟せり甫格は此を見て「憐むべし」とツブヤける「尉官布度は頗る不快なる様子」

「渠等は皆を我々の銃丸を受くべきために生れ来しものを斯る有様にて死せむことは如何にも憐むべし、甫格御身が憐むべし」と云へるは當れり」  
尉官布度を驚かすに憐むべし、渠が虎を索むるとたゞは其の足跡をも見出だせ能はむ今幸にして之に逢へるときは皆を遠くして之を撃つと違あらむ又た偶ま敷の内より来れるものはワナに罹れる鼠の如く之を撃つべきハリもあらむ  
午前二時に至り我々の纜かに林の一方に走り出でぬ顧みれば火勢益々熾しして一面は燄のパノラマを望むか如し蓋し此の火の此の廣大なる一座の林を焼き盡すにあらざれば肯て底止せざるあり  
日出に至りて我々の車を停めて暫く休息せり熱を擦するに象は其右の耳を撃ち落ちて落ちてソコ二三のヒヤをさへ生じたり若し之をして鋼鐵にて造れる動

物にあらざらしめ、當時再び起つ能はざるに至らむこと勿論、我々の不幸なる車の人畜共、直ち一襲ひ来る敵のため、焚かれたるべかりしなり。少しく休息せる後、午前六時我々の再び足を擧げり、十二時一に至り、始めてレワに達して、ヤドリを定めたり。



(以下次巻)

第 十 三 回 六 號 の 硝 色

此日此まゝコ、お留まりて休息せり我々が昨夜承受けし所の疲勞と困病とは此の休息ふよりて全く癒やすことを得たり。今まや我々の眼前に復たオーデ國の沃野あり、我々の蒸氣家は是より將さ道途凹凸せるロキルカンドの地に入らむとするなり、ロキルカンドの方一百五十英里の州にして、バレイリーに即ち其の首府なり、コアラ河及び其の支流縦横母走り、れば灌漑の利極めて豊かにして、コ、カシユに鬱蒼とせる芒葉樹及び林叢の許多散點を見る然れども、是等の林叢は年々次第に鋤犁のため、侵されて轉た其數を減しゆくあり。往る土着兵叛亂の時に當りて、アルヒ既一陥れる後、ロキルカンドの地の叛亂の中心を爲せり、コリンカムアベルも一たびコ、一陣を結び、アリガディールワルポールの軍も皆てコ、に戦かひ、破き、佐官萬妻の友人として、ラックノ一兩度の役に顯功ありし、蘇格蘭の佐官某も亦たコ、一戦歿せり。我々が今進む所の地、坦々たる大路にして、處々水一過ふこと多きも、之を渡る

「甚た容易くしく唯た快走の樂風景の娛あるのみ去れども遠うらを我々の地勢の漸く隆起するに遇ふべし是れ其の隆起するの極遂ふ子パウルある群山の達するの道あり」

電氣のためは其の左脛を麻痺されたる兵彌の翌日に至りては幾ど全く常に復せり蓋し麻痺の唯た一時のものにして我々が或は憂ひたる如く烈し死ものゝあらざりしあり

六月六日七日の兩日の間は布度のナイルガウスと稱する野獸二頭を獲たりナイルガウスは印度に産する一種は青牛あり然れども其形によりて之を言え、青牛といはむより鹿と呼ぬことの寧ろ當れるに如きるなりナイルガウスは布度常は望む所の猛獸ありあらざれども其の恐るべきは幾ど猛獸に譲らず若し些しく傷を蒙るときは直ち獵者のかたに向ひ飛び来るなり

六月八日の朝前夕レワより二十五英里をゆける後到り宿せる所の一小邑を發足せり道途は皆雨のため深く泥濘をなしをれば我々の常の如き速力を以て駛すること能はざるに處々に漲流の蓋し奔るありて幾たびか我々の進行を止

めしめり我々の此は六月の末までには群山のホトリは達するを得へければ前程の最早や甚と遠きゝあらむ

此日一頭の走獸ありて我々が進行はホトリは出てたるが躍然としく我々の象の首は飛びか、れり運轉手易透の叫べり「チータなり、チータあり」

布度の之を聞いて直に銃を提々露臺の上に出せ出で「ウム、チータあり」余「然らば銃撃せよ」布度「驟急するを須ひむ」と答へつ、徐ろに其銃を擬せり

蓋しチータは印度に産する豹の一種母して其の大きは虎に及ばず然れども其の猛悍驚愕あることハオサ、虎に遜らむ

余は萬妻及び潘矩と共に露臺の上は立ちて布度が之を銃撃するさまを見むと十がめをれり

察するに豹は我々の象を見、真の象なりと錯まり認め突然飛びか、りて其肉を食はむとせざるあり去れども我々象の渠の爪牙を容るべき生肉をもて造られを及て鋼鐵の厚皮をもて包まれをれば渠の鋭爪利牙も些しの効をなすことを得ざりしなり渠は是に於て益と怒りつ更らに其耳に飛ひつきて之をムシリ取りむ

とせるとき恰も我々の口、に出でて来りしあり渠の我々の出で立つを見るも、も  
 一、体勢を整へて正しく我々に面しつゝ、怒れる口を開けて高く咆吼せり布度の其  
 銃と擬せるが未だ容易ぶ之を放たず蓋し其の急所を狙ひ定むるを待ちて一發の  
 下、之を斃さむと欲せるあり豹は正しく我々に面したれば固より其銃の前、立  
 てる危険を自ら知れるなり然れども敢て遁れむとふさを渠の却て機を見て我々  
 の立てる所、飛びかゝらむと欲せ  
 既して豹は轉じて再び象頭に乗りて其の鼻即ち煙突を繞り彼の瀧笛を装置  
 せる所の口、進み来り余は再び呼へり「布度今まこそ」布度の答へり「躁急す  
 るを須ひす」

豹は依然其の雙眼を睜り我々をニラまへり度布の之と注視せるま、余は對し  
 く「御身の曾て此のチータを撃たることある歟」余「曾と有らず」布度「御身の試  
 るに之を撃つを欲せずや」余「尉官、余は斯る好獲禽を御身の手より奪ふことを  
 欲せざるあり」布度「咄、速慮に及びを銃を把りて渠の肩下を狙ひ撃てよ若し御  
 身が誤らむよ余直ち一續き撃つべし」余「然らばシカせむ」

我々のホトリみ来り從へる甫格は直ちに雙眼鏡を把りて余にわたせり余は之を  
 受けて尉官の言へる如く豹の肩下を狙ひ放ちたり  
 豹は正しく丸の中れり去れども其創極めて微よりて一聲高く哮れるま、象背の  
 寶塔の上を跳りて我々の立てる蒸氣家の屋根に飛び下れり尉官は之を見ると  
 よもふ「甫格余と共に」と叫べるま、寶塔をさして走せ登せり  
 尉官主従が寶塔の中に入りて其銃を擬せむとせる那時快く豹は躍然身を跳らし  
 て屋根より飛び下りつ傍なる林叢の中、没したり

「止め、止め」と呼ひ、りつ、藩矩に運轉手に機關を止めしむる間、尉官主従は  
 早くも車を下りて林叢の中、追ひ入れり四五分間を経過せり我々の耳を傾きて  
 何等かの響を聴くを遅ちたるが寂として一發の銃聲だも起るあらむ既して尉  
 官主従は手を空くして返り来り  
 布度の我々を見て叫べり「見えなれり、一、點の血の草の上に滴るだにあらむ  
 余「誠に吾の過ちなり若し御身が自ら銃撃せるあらむよ決して斯く誤まつ  
 とのあらざりしならむ余は御身の折角の獲禽を失へるを悲む」布度「否、御身の

正さし命いのち中なせるあり」フホツクス甫格フホツクスの半なかはな沮喪しほし半なかはな尉官じゆう官を慰なぐさむるがごご様子ようすみて尉官じゆう官蓋おほし渠みちの余あまの第三十九頭だいじゅうくじゅうこうとなり若わくく御身おんみの第四十一頭だいじゅういちこうとなるべき運うんを有ありしなりむむ」フホツクス布度フホツクスの稍やや冷然れいぜんとして「豹へうは虎こふあらせ若わし之これをして虎こからしめむにい、毛令もうれい、余あまの御身おんみ一ひと發はつを譲ゆづる意こころにならざりしからむ」さい官佐官さい官萬妻まんさいの傍かたはより「諸君しよきん請こころふテーアルに就つけよ朝飯あさはんの既すでに備そなへり朝飯あさはんを喫くして以もつて快こころよく其齋そのうを遣やるべきなり」

傍かたはに在ありし馬格兒マツグチイル「尉官じゆう官が食事しょくじに就つて其意そのいを轉てせむを望のぞむなり去さり去さり畢ひつ竟まう是れ皆みなな甫格フホツクスの咎とがあるのみ」此この不意かきの政擊かうげきに愕然がくぜんとして甫格フホツクス「余あまの咎とがなり」と

馬格兒マツグチイル「確たしかに御身おんみが毛令君もうれいしんにたせる所ところの銃じゆうは唯ただ六號ろくごうの稍やを装まへるなり」

り」まま云いひつ、正まさは其銃そのじゆうより取とり出いたせる所ところの稍やを出いだし示しせり實じつは是等これら猛獸もうじゆうを撃うつの銃じゆうは適てせざる彈藥だんやく共ともに輕弱けいじやくなる六號ろくごうのものなりま布度フホツクスは之これを視みや

て「甫格フホツクス甫格フホツクス唯ただ々ただ」フホツクス布度フホツクス「兩日りゅうじつ間の禁錮きんこを命めいむ」フホツクス甫格フホツクス唯ただ々ただ」

斯かくて甫格フホツクスのシホしほとして其室そのしつに退しりぞき去されり是れより四十八時間じゅうはちじかんの甫格フホツクスの其室そのしつを出いて、我々われらの前まへに現あらはる、ことを得えざるなり

翌日あした余あまの布度フホツクス及び吳彌ごみと共ともに道みちのホトリある平野へいやを逍遙せうようせり是日このひ潘矩ばんこが半日はんじつをコ、に休息きゅうしやくすへしとせするよりくあり此日このひ終朝しゅうちゆう雨あめふれるが晝ひる及びお空稍そらやも聞きえ齊いったり我々われらの少せうなくとも幾時間いくじかんの晴天せいてんを裁いたくことを得えべきなり布度フホツクスの余等あまらと共ともにコ、に采またれるが渠みちが例れいの猛獸もうじゆうを獵れせむとにあらむ唯ただテールの膳羞ぜんしゆうに供ともふべものを少せうしく獵れらむとてあり此日このひ巴度おとどの尉官じゆう官に其の厨くりやの肉にくの空ひらしきことを語り暗あんに渠みちが出いでゆきて厨くりやを充みたを足たるだけの肉にくを取とり采またらむことを諷ふうせるなり是こゝに於おいて布度フホツクス乃すなはち余等あまらと共ともに家いへを出いでつコ、に采またれることあるが我々われらが二時間じかんの逍遙せうように於おいて獵れし得えたる所ところのものに唯ただ一二の鷓鴣しやこを駭おどらし一二の兔うさぎを嚇おびかせるも過とぎざり我々われらは是等これらの鳥獸てうじゆうを皆みなを極まめて遠とほく隔へたりたる所ところに在ありて我々われらの率ひきひたる二頭にとうの好獵こうれつ犬けんを以もつてしても之これを奈何いかんともすへきやうあらざりしなり

布度フホツクスは全く興きようを敗やぶれり斯かる森穢しんたく沼澤せうたくを唯ただ一面いっめんの茂草もうそうと幾條いくじやうの行還こうげんとを散敷さんしかせる平野へいやにありて固まより前日ぜんじつ失しつへる豹へうの代かりと爲なるべきほどの何等おんらかの猛獸もうじゆうに邂逅かいこうすへき望のぞみあらざるに勿論もちろん巴度おとどのためは請こられて底いりやを充みたすだの肉にく



を得むと欲して来れる其の志をさへ達する能く徒らに手を空しくして返りな  
 バ巴度の所思も恥かしきあり去れども鳥獸の皆を高く飛び速く奔りて我々の敵  
 の内ふ来るふ逢えざるにせむすべなし午後四時に至るまで彷徨せるが我々も未  
 だ一發の銃撃とだ一試むる機會あらざりしあり布度ハ云へり「是れ何等の始末  
 あるぞ、毛令余ハカルカッタ府を出づるとき御身に許多の大獲禽あるべきとを  
 語りたり然れどもカルカッタ府を出て、よりコ、一に至るまで不幸、薄命、否運余  
 ハ之を何と謂ふべきやを知らず然れども要する、余ハ余の言を踐むことを妨お  
 られしあり」余ハ答へり「尉官シカク沮喪をるなるれ余も甚だ御身のため之を  
 憂ふ去乍ら連岡の間に入らば必を更らば好運に會すへきあり」布度「然り、ヒマ  
 ラヤの諸嶺を登りたるに我々の更らば幾分か厚福の有様一に至るへきあり、毛令余  
 ハ寶一我々が取れる所の車甚だ宜しあらざりしを悔ゆるあり見よ其の蒸氣の  
 響機關の響殊一彼の龐然たる巨象の形皆を野獸をして驚怖して速く避々しむる  
 所以にあらざるなし尋常の漁車ありくさへも鐵道の通ぜる所ハ野獸次第に  
 其跡を絶つ寶あるに我々の旅行家の恐るべきに更らば漁車一幾倍せり余ハ斯

るもの舟乗りて進行する間ハ何等の獲禽にも遇へざるを恠しまざるあり唯だ車  
 の止まりて休息せし間此の如く近傍を道達して多少の獲禽に逢ひむことを望む  
 のみ、唯だ憎むべきに浦格なり前日の豹ハ寶ハ惜むべきの至りなり、ソレハソレ  
 最早幾時なるべき歟「余」幾ど五時「布度」五時、既ハ五時なり、而して我々の未  
 だ半個の獲禽をも得ぞ「余」我々の七時までに返れば可なり思ふよ七時お至るま  
 で母ハ「布度」叫べり「否を命運ハ皆を我々に背きて馳せり、御身見ぞや事の成  
 就ハ常に半ハ命運ハ因ることを」余「シカク切迫するなかれ、若し我々が空手  
 一ては返らじと決意すると假定の御身を以て如何と爲を」布度「勿論甚だ好し  
 余も空手一して返らむよりを寧ろ廿日鼠一足を捕へて返るべし」  
 余も布度及び兵彌と共に平野の上を右に往き左に後り縦横に索めあるきたれど  
 も六時半に至るまで一個の小鳥にだも逢はず我々の銃を家を出て、より一たび  
 も改め装へることあらす斯くても我々の銃を携ゆることを須るす只だ杖を提ぐ  
 るも其効を相同じかりしあり  
 布度の様子を看るに布度を只だ齒を切ばりて憤怒の色自ら其の眉目の間に露を

れ其の握れる銃を熱して煙を發せむとほるばかり吳彌は之を視やりて余「サ、  
やたり」斯くてゆりむふに尉官の殺じ自ら其情を制する能はざる母至るべし」余  
「然り、若し今まありて我々の穀の内に小さき鳩一個を放ちくれおは余の之に  
三十シリングを拂ふも敢て惜まざるべし、是れ以て尉官の意を慰むるに足るべ  
きなり」

三十シリングをさらあり六十シリング九十シリングを懸くるも我々はも麼たる  
小鳥一個を得ること能はざるなり此邊は全く生類は跡を絶てる荒野の如く見え  
たり我々の眼界の内一個の隴圃また村落を見ざりしあり若し村落にても有らむ  
には余の定めて兵彌をして竊かに村落に至り何等かの鳥類を買ひ来らしめ之を  
不意に放ち飛しと憤怒焦燥幾ど極まる所を知らざる尉官をスカし慰めしならむ  
夜も次第に采り迫り更らに一時間を閉みせむ最早や物の色を辨むる能はざる  
に至るべし我々も空手にて返るまじと決意したりと雖も固より終夜コ、に彷徨  
まべきはあらねば一時間の後の止むる空手にして返らねばならぬに至るべし  
天氣の再び曇り采りて雨ふらむとする虞れあるのみならぬ萬妻及び潘短の心づ

るひも思はざる可しむ  
布度「真先」立ちて左右を顧みく轉た家を速きかりつと察めゆらり余の之  
を追て其の焦燥をナダめ徒ら無用の勞を爲さずして日の全く暮れざるに及び  
て家へ歸ることを勧めむと欲するトタン余の右方にあたりて忽ち搏きの聲起れ  
り顧みるに正さふ一個の團々とせる黒き影ありて徐ろに茂草の間より飛びた  
むとするなり先き進める布度が顧みるに及び余の直ちに吾が雙眼鏡を擬し  
て兩丸を連發せるに狙ひの爽はせ黒影はドウと響して地へ墜ちたり  
獵犬フ、ンハ飛びゆきて之を師へ尉官のホトリに齎らせり布度「叫べり」扱おそ  
巴度「若し之を得ても猶不満足せむは是れ渠の誤りなり」余「ソは食ふべき鳥な  
る歟」布度「勿論、此際何物か食ふべからざらむ」吳彌「傍より」毛令君「幸にし  
て何人も見をらざりしこそ仕合せあれ」余「何が故に」吳彌「何となれば御身が殺  
せるは是れ孔雀あり印度にありては孔雀は神聖の鳥とし崇びて嚴に之を殺すこ  
とを禁せらるゝあり」

蓋し印度人の孔雀を尊びて敢て櫻るべらざる神聖のものとおし之を殺すもの

の大罪を以て論ずるなり英國人ゴコ、を治むるに及びても此禁の古来の習ひに從ふて依然之を持せるあり

布度「神聖あると否とを云ふなかれ我々のシカキ無用の辯を聞くに違あらむ唯明日テールの上は巴度が料理せる孔雀の珍味を専らを待たむのみ」余「尉官然らば御身の是を以て満足せる歟」布度「満足、然り御身の満足を云ふを得べし余の未だ一發をも放たぬ争て満足を云ふべきや、来れ」

此時大陽の既没して我々が夕ドリゆく道は早やホノ暗くあり来れり吳彌の其肩に孔雀を擔ひつゝ余と共に布度のアトに従ひゆけるが我々の今ま一座の竹林の間を貫ぬける一條の廣路を進みゆけり

進みゆくこと未だ幾くならむ忽ちカナタふ一條の妻まじき咆吼の聲起れり余は我にもあらずて覺えずも立ち止まれり布度の余の手を握りつゝ「虎あり」と云ゆるが復た聲を失して「大變、我々の唯だ小丸を携ふるのみ猛獸に當るべき備をあらむ」

誠然り、布度も吳彌も亦た余も皆を猛獸に當るべき列丸を佩びざりしあり且

つ縦し之を有せるとも此時我々の之を改め装ふに違あらざりしあり今ま咆吼の聲を聞けるより未だ十秒間を経ざるに彼の動物の躍如として竹林の間より跳り出でつ我々を去る二十歩の路上に立ちて

是れ實に一個絶大の虎なり其頭より尾に至る長さ十尺に達すべく黄褐色の間は黠々黒白の斑あり土着人が常に呼んで「人食ひ」とおす所のものにして印度人が此種の虎のため害なるもの毎年百を以て算ゆべし余の今ま渠の路上に跳り出でたるを見たと死に實に吾が手中の銃の自然にナ、さふるへるあり虎は其の兩眼を睜りて我々をニラまへ其尾を左右に打ち掉りつゝ今まにも飛びかゝらむと欲む

布度は是に至りても少しも其帯を失はず慌てど忙がす徐ろし銃を擧げて其狙ひと定めつゝ「六號の硝色、虎と撃つゝ六號の硝色を以てするとい、若し余が正しく其眼に命中するふあらむは我々の」

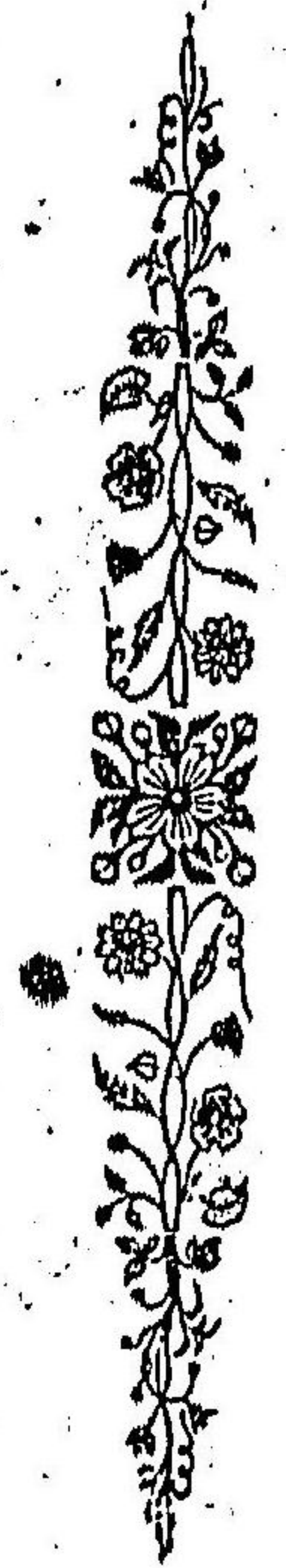
尉官の詞未だ全く訖らざるに虎は早や迫り来れり虎は急に走せ来らむとせず只だ徐々として進み来れり余の背後に立ちて吳彌も均しく其銃を擬したるが亦た

是れ同じく六號の小丸のみ蓋し紙々に唯だ膳差は供ふべきものを求めむとして假  
 るめは出で来るものされば猛獸を撃つべき強勁ある硝色を備へて味は余に至  
 りては先刺孔雀を撃てるまゝ再び銃を装ふことさへ未だなしをらざりしなり去  
 れば余は急し硝色を取り出だして装むむとするを尉官は叱し止めて低語せり  
 「動く勿れ聲する勿れ徒ら虎を驚かし跳らしめむ」  
 我々の三個只だジツと石像の如く立ちあたり虎は徐々として進み来れり兩眼の  
 光は炯々としてアタリを射り今まや先さよ立てる尉官と相去る僅るは十歩を出  
 てむ  
 尉官は只だ屹然として立てるまゝ其の全幅の精神を兩眼の上へ集めて一心は狙  
 ひを定めり、危難目前は逼りて我々三個は幾ど生くべき望みあらざる此の急絶  
 の際、當りても尉官の胸に常の如く此しも鼓動するさまあらざ  
 虎は既し五歩の間は迫れり余は最早も忍ぶ能はず「布度放てよ、放てよ」布度「否  
 否」と答ふるのみ蓋し其の彈藥の輕弱なる固より虎を驚すは足らむ唯だ一の望  
 みは其の兩眼を撃ちて之を脅すするはあるのみ去れば尉官は成るべく相接し相

近づかむを待てるあり  
 虎は更らし三步を進めり將さに身を跳らして我々へ飛びかゝらむとせる那時快  
 く轟然と高く響ける一發の銃聲續て響ける第二の銃聲虎は二丸に續け撃たれて  
 苦しみ叫り二三度踊りあがれるが其まゝ驚れて息絶えたり  
 布度の叫べり「不思議、不思議、余の銃は如何にせるか烈丸の装ひありしなり、  
 六號はあらざり烈丸あり」余は驚き叫べり「ソは真ある歟」布度「御身自ら之を見よ  
 と」云ひつと取り出だす硝色を見るは是れ實は六號のものあらざ  
 一切の事始めて悉く明るにされり蓋し布度の大機銃と小機銃との其大さ相同  
 じかりしあり甫格は一時誤りて送みに其の硝色を装ひちがへりなり、甫格の此  
 過ちの前日彼の豹の命を救へり而して今日我々の命を救へり  
 布度「實は然り但だ余は吾が生涯に於て是れまで未だシカク死に瀕せることあ  
 らざるあり」  
 斯くて我々の無事に家に歸り着けるが布度の甫格を呼び出だして有りし次第を  
 語りたり甫格は聴き了りて「尉官是れ適き余が禁錮の兩日ふあらざりて四

日あるべきを證するなり、何とされば余の二様の失錯をなしたればなり」尉官の領づきて「然り禁錮四日、當るべし去下ら御身の過ちより余が余の『第四十一頭』を獲たることを賞すべし余の此の金貨を御身に與ふるなり」

六月十二日夕一小邑のホトリに至りて止まれるが別に記さるべきほどの地はあらぬ斯くて翌日我々今更我々と彼の子パウルの群山との間を隔つる九十英里（三十六里）の旅程に始めて踐み入りたり



第 十 四 回 世 子 ゴ ー ロ ー シ ン

數日を経過せり我々の是に於て印度北方の高地に登りはじめり是より以往の次第に隆起せる道を過ぎく更らば隆起せる道に入り岡に登りて復と岡に登り山を度りて再た山を度り遂に地球の上ふ於て最も高地と稱せらる、所に至るに終るるあり、に至るまでも地勢の既漸やく隆起せるなれども但だ其の勾排甚だ陵夷して自ら覺えざりしあり

天氣の動もすればアラシを求めし雨を降だす去下ら暑熱の補や堪え易きと道途未だ甚と惡しからざるとより我々の著るしき困難を受くるに至らば

ガングスの野よりオーア及びピロキルカンドの境に至るまでの間、廣がり布ける所の渺々たる廣原に全く盡きて今更北方を望めば起伏蜿蜒せるヒマラヤの諸峯眼界を限りて横はり走れり南西の風を驅らる、雲片の皆赤く、に聚まり停まらるなり我々の未だ此の大山脈の梗概と見得へき地位に達せされども次第にシベットの境に近づく、隨ひて風土の有様は次第に變じ来り目も觸る、もの皆を轉た遊僻の氣象を帯び耕田漸く減して叢澤漸く増し采るを見るなり植物の如き

亦た是れまでふ同しうらぎ是れまで屢々目ふ習れたる棕櫚の全く跡を絶ちて代  
 ゆるは鬱々たる芒葉樹沈々たる緑竹林を以てし殊にバナノの如きは到る處無數  
 の實を垂れつ茂み繁へり其他マグノリアの白色大輪の花より一種馨烈乃香  
 を放ち楓樹柏樹栗の木ゴムの木の參差として路傍に蔭立せり  
 唯た若干里をゆく間には蕪又竹を編みて造れる家の幾個か相集まりて村を成  
 せるもの、散在するもの無たはあらざ唯だ高地に入れは入るほど戸口の益々稀  
 少となり来るを見るのみ  
 この時は當り地平線内の灰色せる濛々たる天ともく掩られ雨の屢々覆へる如く  
 降り来るあり六月十三日より十七日に至る四日の間は於て我々の唯だ六時間答  
 穹と藏くと得たるのみ新りければ我々の日は唯だ家の内なる客室に在りて夕バ  
 コを喫し象蒸を下し或はカルタを闘はして時を消せるのみ  
 六月十七日我々の家の一個のセライ即ち客商の歇店のボトリに至りて止まりた  
 り此日空は稍や明かして雲薄まかりき象は此の四日間太く其の進行に倦れた  
 れは些しく之を休息せしむるを可しと去れバヤドリを定めむは猶早々け

れども此日此のまゝ、コ、は休息すべしとあせり  
 客商の歇店謂はゆるセライの中央に廣き方形の庭を置き此庭を圍みて家を繞ら  
 し建つるありセライの内は在りて米賣を接待する人々の料理番及びピステと稱  
 する水の給仕役カンサマと稱する食物の給仕役の三種あり凡そ是等ハセライに  
 多く一個の會社の附屬として會社が各々其の手代を遣はして之を管せしめ又た  
 時々其の地方の支配人をして之と巡視せしむる所あり去れば其の取締の嚴重あ  
 るは尋常旅店のたぐひにあらざ殊に一種異様なる取締は凡そ一個の旅人が歇店  
 に逗留するの限りの二十四時間とし若し二十四時間以上逗留せむと欲するを  
 謂はゆる支配人に届けて特に其の許しを受たねばならざ若し支配人の許しを受  
 けざるもの新着の旅人隨意に之を逐ふて其室を奪ふとを得るなり  
 我々が今ま此のセライのボトリに至れるとき例の如くソコに宿せる人々を驚か  
 せるは言ふもさらなりセライに宿せる人々の我々の象を見て其の異様なるふ驚  
 くと、もに稍や一種不快の感をさへ生ぜしなり  
 去れども此のセライに宿せる人々の尋常一様の旅人にあらず彼の子パウルの近

傍ある分營に赴むかむとする英國官吏もあらざれば亦たラホール或ハベシヤ  
 ワルを經くアフガニスタンの境に入らむとする印度客商の多くもあらざ  
 し一個獨立のグーザレート國を御する王其の世子ゴローシンが其の先驅後從  
 を率ひて印度の北方に赴くものにてありしなり  
 此の世子の一行は獨り此のセライの幾室を以て足取りとまるとる能はるを更ら  
 幾個の家を借りて其のヤドリに充てたり  
 余は未だ曾て印度の君主が旅行するさまを見しことあらざれば我々の車が止  
 まりて此日のヤドリを定むるや否や余は布度及び潘短と共に謂ひゆる世子ゴ  
 ローシンの旅館を觀むとして彼のセライに赴むなり  
 一國の世子が旅行せむと欲するときは單身にて足を擧ぐる能はざるに固より明  
 らなり因りて思ふに世界の中最も羨まじからざる者其の一擧手一投足も  
 少くも一百以上の人を伴ふにあらざれば能はざる所の人の地位あり彼の背  
 には包を負ひ手に杖を提ぎ肩に銃を擔ひ飄然として行く漫遊の旅人の境は一たび  
 城外舟出づるより其位に應じて幾百の先驅後從を率ひざるを得ざる印度の君

主は優ること蓋し甚だ速きなり  
 潘短は余に語れり「印度の君主が旅行するときは是れ之を一個の人がゴ、より  
 カシコに赴くありと云ふを得む直だ幾個の村が相率てゴ、よりカシコに移るも  
 のなり」  
 我々の先づ世子の旅館のホトリを巡り視るに蓋し世子の一行は其人五百に超ゆ  
 べし犂へ立ちたる喬木の下に約そ二百輛の車繋ぎあり其車の或はゼブラ（形馬  
 の如くにして其皮は豹の如きもの）を駕せるあり或は水牛をして之を牽かしむ  
 るあり中に就て三頭の巨大なる象あり象の背に各々美しく裝飾せる轎子を馱  
 せり其他二十頭の駱駝あり又た世子の肩を唄ましむべき樂人世子の目を悦ばす  
 べき舞妓又た世子の間に消すべき手品師一として具りをらざるなし要するよ  
 斯る多勢の人ふ各々其の俸祿を給し長途を旅行せむこと其富印度の國王の如  
 きもの、あらざれば何人能く其の浪費に堪ゆるを得むや  
 羯鼓、鏡、大鼓など各々其の得たる所に従ふて之を奏する樂人は衆音の諧和せる  
 調子と云へることより唯た其の聲響と云へることと専ら心を勞するの學派た

り手品師の中より蛇と使ふザッブワルラ巧み一剣を舞らすシューチユイ廻を踏み  
 て躍る所のアフロバットなどサマ／＼の術士あり又た舞妓の一樣に美しき寶石  
 をもく其身を裝飾し腕に黄金の環を穿ち手足の指に各々寶石を鑲めたる  
 黄金の環を穿ち其の脚目に白銀の鈴を掛たり是等の舞妓の斯る装ひしを以て  
 有名なる『鷄子踊』を演ずると云ふ  
 此外又た數多の男女幼兒ありて隊中交はれるが男子は概ねドーテと稱し木綿  
 の長きキレを穿るゝあらざればアンガルカと稱する襦袢若くはヤマと稱する白  
 色の長衣を着るあり女子はジャツケットの袖を短かくせるが如きヒーリと稱する  
 服を穿つふあらざれば男子のドーテにひとしき長た木綿のキレを纏ふあり未だ  
 夕飯の時に至らざれば渠等の皆を樹下へ搬たりて或は緑葉にタバコを巻け  
 る一種のシガレット或はタバコとアヘンを混して製せる謂ゆるグーラゴ  
 を煙管に盛りて之をクユラせり渠等の今ま我々のコゝに采れるを見るや否や直  
 ち一身を起して地上に躓まづまつ、其中より『貴官』『貴官』と口々に呼ぶるも  
 のさへ多かりき我々の莞爾とし藹然とし笑容をもて懸るふ之は答へずソコを過

ぎぬ  
 既にして歌店に前に至り見るに世子ゴローシンの將に一場の饗宴を催さむ  
 とするもれ、如くセライの廣庭に方さゝ其の備へとあすに忙しかりき余は斯  
 る有様を見て世子が我々のコゝに在ることを聞かば或は我々を招きて此夕の  
 饗宴の佳賓となすこともあらずやと潘矩に語るに潘矩は頭を掉りつ、「ゲーガ  
 レート國の王に往る土着兵叛亂の際に現に叛形を露わさるのみよし、頗  
 る土着兵に應接するの勢ありき蓋し渠は全く英國人を忌み疾めるなり去れば其  
 の世子たるゴローシンが好意をもて我々を迎へむこと、覺束あし」尉官布度  
 はサモ不快ぞ其肩と掉りつ、「好し好し我々の國より渠の饗應を受々ざるも  
 不足なきなり  
 潘矩の説に定めて當れるをあらむ我々のセライの内に入りて其の模様を見たしと  
 乞ひたれども是れさへ拒みて許されざりき斯くて我々の家へ返れるに家には既  
 一巴度の塩梅せる馳走ありて我々を夕飯のテーブルに待てり  
 我々の發足は六月十八日即ち明朝日出と、もみまへしと定まりたり五時に及ぶ



ころほひ可郎の既に火を燃やしてのめり、四十分を經る後、機關の既に全く其の蒸氣を蓄へ、芻透の將さに發足の合圖を爲さむとする折りしも、忽ちカナタより一群の印度人ありて我々のかたよ近づき来れり。但た見る五六個、乃盛服せる印度人、薄絹の下衣に白色の上衣をかき、ね頭に金線にて縫箔せる頭巾を戴き、つ馬に跨がり、其の前後に十餘名の衛卒ありて、各々銃を擔ひ、劍を佩びて之を護擁せるが、其のうちの一箇は手一緑葉の冠を捧ぎたり。是れ明か、何等か高貴の人の其中に在ることを示せるなり。此の高貴ある人とい即ち他にあらざ、世子ゴローシンありしなり。ゴローシンの齡三十五歳ばかりあるべし。風采尊大よし、一見以て其の人母君たるの品位を見るへし。

世子の家、のホトリに立てる我々に、目もかなむツカくと、今ま芻透が動かしむとする大衆のホトリに進み近づたるが、其の自ら抑へむと欲するも、拘はらざ感歎の色、自ら其面を露はれたり。

渠は芻透に向て問へり、「何人か此れ機關を造れるや」



大 叛 魁 第 五 圖

剽透の裁々のホトリよ立てる工學士を指さし示せり

世子の潘矩のかたを見やりつ極めて自由なる英國語にて「御身が之を造れる歟」

潘矩「余之を造れり」世子「人あり嘗て余よ是れ故のプータン王の工夫よ出でた

りと語れり真歟」潘矩の頷なり

世子の其肩を聳やかしつ、「優かに車を引くべに血肉を備へたる象よ事を缺か

ざる所のプータン王よして故らに斯る機關を用ゆるるとは將た何の心ぞや」潘矩

思ふに此象の力のプータン王の養へる最も強き象にも更らよ勝りたるを以てお

り「世子の肯て信せざる氣色にて」更強しと潘矩「嘗だ相倍するのみならむ」

傍らに立てる尉官布度の世子の有様に甚だ不満おして「世子若し此象が動かじ

を欲するときは御身が厩中の如何なる巨象を幸き采りて之を動かしめむとせる

も決して一寸をも移さしむること能はざるべし」世子「御身の敢てシカク大膽お

る詞を言ふことを得るや」潘矩「殿下吾友の之を保するを得るあり余も亦た殿下

よ保するを得べし御身が奮へる最強の巨象三頭を一緒に置き以て之を引かしの

むとするも渠に能く之よ敵して一步をも移すま」世子「余の其言を信せむ」尉

官布度「信せざれば御身は惑ひあり」潘矩は更らに之を和して「若し殿下が値を厭はば余は能く御身の腕中の最巨の象二十頭のカノ敵すべき象を造りて進むを得べきなり」世子は冷然として「之を口にするは甚だ易き事」潘矩「之を實際に造るは更らふ易き事」

世子は甚だ激昂せる氣色にて暫し黙然とせしが「然らば茲は此象の力を實際するを得む歟」潘矩「勿論」世子「若し御身は之を重からざるに余は茲は巨額の財を賭して我象と此象との力を角ぶべし」潘矩は其手を拱めまつ、「殿下に何程の額を賭せむと宣ふかや」世子「若し御身が四千ルピーを失ふことを悔むれば余は四千ルピーを賭せばし」

四千ルピーは英國の四百磅(二千圓)に當るなり是れ頗る少なからざるの額なり余は潘矩が縦ひ此象の力を信じて疑はざるよしせよシカと巨額を賭するか如く輕率の行は得爲すまじと思ひたり潘矩は果して直ちに答ふる所あらば若し布度にありては其の囊中を斯る事を用ひて妨げふき財あるしむよの必む世子の云へるより相倍せる額を賭して厭はざりしならむ世子は潘矩が直ち應答するさま無

きを見て「御身の否む歟御身の之を賭するを難かる歟」と語りたり蓋し世子はありては四千ルピーの財は只た半日消閑の資にも當らざりしなり

「諸、賭をべし」と云へる聲背後に起れり顧みれば佐官萬妻正きに我々のホトリに進み立てるなり世子は萬妻を視て「御身が四千ルピーを賭せると云ふ歟」佐官「一萬ルピーなりとも、若し殿下か之を厭はむ」世子「好し、一萬ルピー」

一場の光景益々熱し求まり工學士の佐官の手を握りて暗に佐官が敢て此の儼岸をる世子は當りて我々の面目を持せることを謝する氣色に見えたりける去れど其の肩のホトリは又た幾條の皺の生じて見ゆるよぞ余は工學士が太りし其の襜褕の力を誇誇せるより心竊かに輪贏に憂ふる所あるにあらむやと懼れたり布度に至りては些しも憂懼の氣色なく満面に笑を溢らし象のホトリに進みよりつ

「コヤ奮へよ、汝は今我々英國の名譽の爲めに闘むと走るあり」

我々は一同道の左に立ちて様子を見たり又た此の事を早くも傳へ聞きたる印度人一百名はあり皆なコ、一聚り會して此闘を觀むと欲す

潘矩は直ち象背ある寶塔を昇りゆきて勿透と共は蒸氣を操排せむとす世子は

其の從者の幾個に命じて直ちよセライよ返りて三頭の象を牽き来らしめり熟視  
 するよ是れ嚮死に我々が樹下に懸かれたると見たる所のものにして皆あべんが  
 ルの産なり之を南部印度に常し有る所のものよ較ふれば其大さ殆ど相倍し近く  
 之を看るとさき死がら小山のユルぎ出でたるかと思ふばかり其項よは各々一個  
 け御者ありて跨がり座し時に隨ひ聲を發し手を動かして之を指麾するなり  
 既ししく太き鎖索を取りて三個の象と我が蒸氣象とを相約せり余は是に至りて  
 吾心の急し跳りて止まざるを覺えたり去れども佐官萬妻は昂然として些しも常  
 し異ある所あらざ潘矩は世子よ云へり「準備は悉く了りたりイツありとも殿  
 下の必みたまはむとさ」世子は其詞の訖ると待たず「直ちに、直ちに」  
 世子ゴローシンは逃かよ三個の御者と目して馳せよと命ぜり三個の象は首を  
 駢へ御者の指麾し從ふて其の太き足を舉げ一齊に進み去らむとせり蒸氣の象は  
 ジリ、と是れか爲めに曳かれはじり余の思ひ声を失せり  
 潘矩は寶塔の中に在りて其の機關を捻ちつ、「止まれ」と呼ばりたり我が象は  
 轟然としてソコに止まり動めざるなり御者の各々聲を放ち手を揚げて三頭の象

を激するよぞ三頭の象は皆初め一倍して其力を奮ひつ、足を舉げ進み去らむ  
 と躍りくるへども竟に其効あらざ我が蒸氣の象は屹として地中より生へたる如  
 く見えしなり  
 之をナがめをりし世子ゴローシンは其唇を齒しめて遂に血を出さずよ及べ  
 り布度は頻りよ手を拍らて喝采せり  
 潘矩は再び呼む、れり「進め」之を聞ける布度はコナタより應じ叫々べり「然り、  
 進め、進め」  
 一同の濃き湯氣の鼻孔より立ち騰ると、も吾象は徐ろに足を舉げて進みはじ  
 めり三頭の象は足を舉げ足を翹だて必死とありて之よ抗するよも拘はらざ自づ  
 から吾象のためよ曳かれてジリ、と却歩しはじり  
 布度の更らに絶叫せり「進め、進め」我が象は少しの勞苦せる態もなく彼の足を  
 もて土を踏まよちり穴を穿ちて躍りくるふ三頭の大象を曳きつり二十尺ば  
 りり進み去れり三頭の象は終に地上に倒れ顛るびて徒らに吾象のためよ曳か  
 れのけり

萬葉のコナタより合國を爲せり藩矩に其の機關を止めり吾象に再び屹としてソ  
 コに止まり立てり此とき世子が三頭の象ほど憐れし見えしもの後た世間にあ  
 らざるべし其の長き鼻の泥は塗れ太き足は天一朝しと徒らよアガきつ、只だ龜  
 の子を仰むけし伏さしめたるが如くあり  
 世子は且つ慚ぢ且つ怒りて全く其觀を終ゆるに及ばず勿々ソを立ち去れり三  
 頭の象は解き放ちて之を印度人に返せし渠等の皆を我が象に恐れて頭を垂れつ  
 、悄悄として牽かれ去りたり  
 十五分ばかりの後カムガル即ち世子の書記官の改めて我々の許に來り佐官に一  
 個の袋をわたせり即ち約せる所の一萬ルビー(五千圓)を盛れるものありき佐官  
 は一たび其袋を受けたるが極めて冷然として直ち之を推し返し「是は殿下に  
 從へる人々」と云ひすて、静かに入りに去れり  
 我々を幾如せる彼の傲岸世子を挫ぐに實は是より善きありきあり  
 斯くて我々の印度人の讚呼の聲の中に世子ゴローシンの旅館をアトとして發  
 足せるが翌日の地勢漸く隆起せる爪さき上りの道はか、れり是れ即ちヒマラヤ

群山の地方に入る第一段の境あり  
 六月十九日より二十五日まで七日の間は此の爪さき上りの道を登れるが二十五  
 日に至りて一面の高平なる野に達せり藩矩はコ、は休息を命じたり蓋し我々の  
 是に於て正さにシベツト群山の麓に達したるものにして北部印度の旅程の第一  
 次の即ちコ、に終れるあり  
 蒸氣象はカルカタ府を發足してより是に至るまで九百七十五英里(約を四百里)  
 の道を過ぎつ正さに海面より抽くこと六千尺の標地に達りて其車を止めしなり  
 今我々の頭上は聳ゆる山の即ちグワラテリにして其の絶頂は高く二萬七千尺  
 の空中に翬飛するあり



第 十 五 回

タングットの巖居

我々の佐官萬妻の一行がカルカタ府を發足してより遂にインドチャイナの境に入りシベット群山の麓に安着して茲に其の冬どもりも就けるまでを見られたに暫らく題を改めて本話の初めに於て他の幾個の人物の事を説くべし讀者の彼の蒸氣家がアーラハバドに止まるとき有りし事の次第を記し臆すべし五月廿五日のアーラハバドの新聞紙に佐官萬妻に拿沙毘の死を報じ知らしめり從來屢々流布し又た屢々取消されたる拿沙毘の死といへる一報に比度に至りて竟に真となれる歟佐官萬妻が新聞紙に詳述せる所を現に讀みながら猶ほ拿沙毘を以て生けりとし往る一千八百五十七年の怨を渠が身は釋くの望を未だ絶たざりしに果して據どころありと走る歟我々の且らく拿沙毘が三月七日の夜其兄バラオラオ及び其の手下の兵六十名と共にアドジュンタの洞を走じれるより後の事どもを觀て以て渠が死の信否を判すべし六十時間を閱させる後拿沙毘はタブテアの流を渡りサウトボラ群山の間に入り来れり蓋しコ、はアドジュンタを去ること一百英里にして拿沙毘が其身を隠

すよの最も強固の所ありしあり子ルバツダの流に兩山の間を走り其南に聳ゆるをサウトボラと名し其北に聳ゆるをヴグンドヤスと名す此の兩山の送みは曲折盤回し凡そ人が追蹤を免れて伏匿するに最も便宜の有様をなす加ふるに其隣に又たグンド種族の栖めるグンドワナの一州あり

グンドワナの廣袤二百方英里に亘り三百萬餘の戸口を有せり目下陽に英國の治下に屬するといへども住民は決して英國に心服せず孟買府よりアーラハバドに至るの鐵道に此のホトリに走れども住民は依然として些しも文明の化を受け若し之を勸誘し煽動するものあらば何時までも群起して英國を叛くことを憚らざるべしグンドワナの北に亦たペンデルカンパの一州あり住民は皆を慘酷にして詐り多く凡そ印度に於て政事上又た人事上罪を負へる所のものに皆容易にコ、に至りて其の伏匿の所を求むるを得るなり且つ印度にありて尤も恐ろしき教法と稱せられ彼の人を殺すこと最も多きを以て最も功德と名せサグ宗の信徒は實に此

のバデルカンドを以て其の本據とを定むるあり  
 グンドワナの東に環を接せるハコンド種族の極めるコンデスタンとしてコンド  
 種族の皆土土地の神トダベンノル及び軍陣の神マウチクソロを奉じ此の二神の  
 爲め殺して以て犠牲とする所の男女毎年幾何といへることを知らず英國人が  
 常に其の殘忍の俗を改めしめて之を正さむと務むるにも拘はらむ其の弊風は依  
 然として少しも衰へず  
 グンドワナの西に又た戸ロ一百五十萬乃至二百萬を有する所の一州あり即ち昔  
 時慄憚を以て一方に稱せられたるビール種族の極む所たりビール種族の皆常  
 一ミルコワ樹より製せる一種の酒を嗜み飲む苟くも之に酔ふとき其の暴烈殆  
 ど量られず一齊の呼號と、もに相闘ひ相殺して死に就くこと視て猶不眠に就く  
 がごとしと定むるあり  
 凡そ是等の諸種族の皆叛服常なき慘酷慄憚のものにして拿沙毘が其の土着人  
 一得たる所の名譽と尊崇とを以て之を収縦し之を煽動せむ其の大舉して英  
 國人一畔き起らむことハ賢し甚だ容易あるあり拿沙毘は能く之を知れり故に今

ま其の本據をコ、一求めむと欲せるなり  
 パラオラオは嚮き子パワルの境に遁れてより多く既に死せりと思はれたれば  
 英國政府の耳目も甚だ是に注がせ若し渠をして其第拿沙毘と見まがふばかりに  
 善く相肖たるにあらざらしめば渠の或ハ英國巡查の眼を免かれて優かハ印度の  
 内地を逍遙するを得たるをらむ唯だ拿沙毘に至りてハ英國政府が巨萬の賞を懸  
 けて其頭を索むる所あれば必を深く逃れ避けて其跡を掩はざるべからざ  
 然るに茲に偏強の所ありて死も拿沙毘に天設の府を與へたるあり  
 拿沙毘の手下に属せるグンドワナ産の祭内者ハ今まコ、一達るといへも一先づ  
 此の谷中ふ在りて曾て人々多く知られざるタンダトの巖居を擇びて之を拿沙毘  
 一進めり  
 巖居は土着人が構して以てバルと名を所にして率ね深谷の中に在る堆巖の絶頂  
 を居とせるものをいふ偶々外間より乘れるものありて其の絶頂に登らむとする  
 も其路を得る能くを巖居の住民の或ハ又ケ穴の間道とくやり或ハ其ホトリの川  
 の中を舟ゆみて上下出入し些し道途のアトあるを許さず其の巖の絶頂に幾

多の大水大石を積みありて若し巖居の住民が喜ぶる所のもの、敢て登り来らむとするを見るときは幼き小兒の手をもて之を推すも容易し其の木石を顛はし墜として登り来る者を粉碎するを得る備へあり又た巖居の周邊は柵を結び嵩を築きて縦し不意に登り攻むる者ありとも獲るべき之をコ、に拒ぐ設けあり凡そバル即ち巖居の斯く外間と相絶ちて深谷の中は孤立するものあれども其の巖居と巖居との通信は又た極めて便捷なるものなり一個の巖居は事ありて烽火を挙げ合圖を傳ふるとき未だ幾分間を開みせせして能く其信を六十英里（廿四里）の外に通ずることを得るあり去れば或は英國の兵若くは巡査隊が追跡せむと欲する所の亡人ありて子ルバダの流を遡ぼり是等巖居の散布せるサウトボ一ラ深谷の中に進み入ることあるとき最も先づ之を見ざる巖居の住民は直ちに其の合圖を傳へて優かよ亡人を逃走せしむるあり

今ま拿沙毘が案内者の建議によりて選び定めたるタンダトの巖居は即ち是等バルの一個にして其の要害亦た尤も勝れたるものなりしなりコ、に嘗て人の住めることありたれど既久しく廢墟となりて樹木の生ひ茂れるよど先づ之を

燒きて熟ら左右前後の地勢を察するに拿沙毘が其の手下と共に窟を結ぶよ其の廣き僻々して餘裕あり加ふる絶頂は深く森穢のため蔽われたれば驟かにコ、に來れる者が之を索め見むとするも其の所在を認むる能はず又た能く其の所在を認めてコ、に登らむとするも唯だハツルの流に入りて其の水中をあゆみ遡るよあらざれば他に路あらざ又た能く之をあゆみ遡りてコ、に達するとも其の巖居には一條のヌケ穴ありて拿沙毘の容易し是より遁れ走るを得べし要害此の如くあるがうへにコ、はグンド種族の間にさへ多く知られざる幽僻の所にして唯だ拿沙毘の手下の案内者の如く此邊の地理は最も熟せる者の一二之を知るあるのみ去れば今ま拿沙毘兄弟が英國兵の追跡を避けて其身を隠さむよ此のタンダトの巖居は若くもの復た有らざりしなり

拿沙毘が巖居の内部を熟視するうちバラオオの彼の案内者に向ひ「更らよ一ニの間ふべき事あり此のバルは久しく廢墟となりをりし歟」案内者「既に一年以上」バラオオ「最後よコ、に柵める何人ある歟」案内者「唯だ一團の流民しして僅かよ數個月留まれるのみ直ちよ棄て去りしなり」バラオオ「其の流民は何



故にコ、を棄て去りしや「案内者」何とあれ、此の土宜の渠等に十分の食を供するふ足らざりしが故あり「バラオラオ」其の流民の去れる後何人かコ、は極めるを聞かざるや「案内者」否や「バラオラオ」英國の巡查若くは其他の問者などがコ、に至れることあらむや「案内者」決して「バラオラオ」何等か外國の人のコ、に采れるものあらざるや「案内者」是れあらず唯だ一個の婦人の外り」

バラオラオは叫びたり「一個の婦人と「案内者」三年このあた此の子ルバツダの溪間を彷徨せる一個の婦人」バラオラオ「其の婦人の何者なる歟」「案内者」余は渠の何者なるを知らず渠のイツコより采れるを知らず是れ猶り余のみならず此の溪間を極める者未だ渠の外國人あるや將た内國人あるやさへも知り得たる者あらざるあり」

バラオラオは暫し沈吟せるが「シテ其は婦人の何事を爲せるや」「案内者」渠は只だ往きつ復りつ此邊を彷徨し人の布施善捨よりして生活せり此の溪間に極める者の皆を一種尊崇の念もて渠を待てり余も渠を吾が巖居に迎へたること屢々あり渠は曾て一言も發せることあらむ衆皆を聳者あるべしとなせり余も亦たシカ

ク信ぜるなり夜に至れ、渠は其手「一把の炬を執りてイツコとなく徘徊するあり去れ、人皆を渠を呼て Rowing Flame 『知らぬ火』と云へり」

バラオラオ「若し其の婦人が此のタンダトの巖居を知りたらば我々がコ、に宅せる後再び復た歸り来りて我々の後難を貽を憂ひあらむや」「案内者」否、是れあらす渠は狂女子あり渠の精神は昏耗せり渠の眼は視れども見えず渠の耳は聴けども聞こえず渠の舌は詞を發する能はず渠は幾と替者聳者聳者と一身に無ねたるものなり

案内者が當時子ルバツダの溪間「有名ありし「知らぬ火」の事を語る所に此は如くありき蓋し「知らぬ火」の名を以て土着人に稱せられたる一個の狂女子に其の顔色の憂鬱して蒼ざめたるふも拘らむ猶ほ常勝れたる一段の美を具へ自ら押る可らざる姿あり此邊を散照せる巖居の住民は皆を一種尊崇の念を以て之を待てり未開無智の人民の常としてグンド種族は亦た極めて迷執の心は深かりければ「知らぬ火」に至る所は厚過ぎれば若し饑ゆると死に食を興ふるものあり疲る、やまの臥床を供するものあり而して此の不思議なる無言の婦人の一語の

稱謝もさく皆を之を受くるあり此の婦人がイツコより此邊に來れるや其炬と點するに何の謂われあるや其の炬の光に其路を照らすがため歟將た猛獸の害を避をむと欲するたの歟凡そ是等の皆を何人も知るを得ざる所あり時ありては渠の數個月見えざることあり其間渠の如何ふありゆけるや或はサウトボーラの谷を去りてヴランドヤスの野ふゆるる歟或は子ルバツダの流を超えてマルワ若くはバンデルカンドの地方に遊べるや只だ是れ香として測り知るべからず時ありては見えぬをまざるがまゝ、久しく復た歸り來らざることあり衆皆を以て死せるとなすあり然れども渠は死せず復たイツの間にか依然たる顔色も飄然と此の溪間に顯ゆる、なり蓋し困憊疾病などを云へるもの此の婦人の身体に些しの權力をも及ぼすこと能はむと見ゆるあり

バラオラオは案内者の語る所を聴き了りては良や久しく頭を傾々をたりしが更らゝ其乃狂女子の現はイツコに在るを知れる者なきやと尋ねたり案内者の答へり「余は之を知らず半年ばかりこのかたに既に久しく此の溪間に在りて渠を見たる者あらざ思ふに渠は死せるならむ縦ひ渠が猶や生きをりて再び此の巖窟

に歸ることあるとを少しも憂ふべき所あらざ渠は只だ一個の自動の石像に過ぎぬ渠は御身を見る能はむを御身を聞く能はむ渠は決して御身の何人あるやを知ること能はざるなり渠がコ、一暮るとも一日若くは二日をコ、一暮らしつ夜に入れば則ち其の炬を照し家々の間を徘徊しあるくのみ渠が生活の有様は唯だ此の如きは過ぎを且つ斯く久しく渠の見えざるより考ふれば此たびこそ渠が再び顯ゆる、ことをなきに終ゆるべし渠は心久しく既に死せるなり今まや其身も亦た死せるあらむ」

斯りなればバラオラオも別に此の狂女子の事を拿沙毘に報するに足らずとして打ちすてたり

拿沙毘兄弟の一行は遂にコ、一柳を結びて其宅を定めたるが既に一ヶ月を閉みせるも謂はゆる『知らぬ火』の香として復たネルバツタの溪間に歸り來らず



第十六回 『知らぬ火』

三月十二日より四月十二日に至るまで一ヶ月の間、拿沙毘はタンダトの巖居より閉籠れるまゝ肯て出てざりき。渠は斯くして英國官吏に己れを死せりと信ぜしめ、以て其の追跡を欲せむと欲せるあり。

畫間、手下を放ちて谷中を巡廻し、近傍に散布せるもの、巖居の動靜其他の有様を探り報せしめ、夜間、拿沙毘自ら其兄バラオラオと共、子ルパッタの岸に沿ひ村より村巖居より巖居と遍ねく訪あるくあり。斯くして熱く情勢を察するに、慄慄殘忍詐り多きビール、コンド、及びグンド等の諸種族の皆を英國人を怨みて、苟くも之を誇ぶものあれば直ち一群起せむ様子あり。拿沙毘は猶ほ深く自ら慎みて、唯だ二三の有力なる會長に面會せるのみ、未だ輕々しく人に接せむ去れども、是等の會長より探り知る所を以て、まれに拿沙毘の名に一呼して、直ち一幾百萬の衆を得へきこと甚だ明かあり。

斯くて一ヶ月を閉みせるに、拿沙毘は最早、以て安らかに其働きを肆まよするを得べしと思ひは、ゆめりこの時、當りて渠が孟買府の管内に見られたりとの

噂の次第に薄らぎて、問者の歸り来りて報ずる所は、據れば孟買府の知事、遂に嚮の噂を取消すむねの告文を發するに至れりと云ふ。彼の一人は、拿沙毘の許に、度ありて、拿沙毘の面を熟識せしと云へる。アウランガバドの漁夫が、ドーダマ川の堤に於て、拿沙毘の匕首を斃れて、より後の復た一個の彼の亡命の乞食僧に、即ち世子段徳範なりと云へることを知る者あらざり。斯くするうちに、種々の風説も漸く疎になりて、二千磅の懸賞を獲むと欲する人々の望みも全く絶えつ。遂に、拿沙毘の名の次第一人の記憶に上ること希れなるに至れり。

拿沙毘は是等の報を聞て、以て是れ可ありとなし。乃ち四月十二日、始めて其の巖居を出でしを初めとし、漸やく其の近傍の各地を遍歴しは、ゆめたり。唯だ其形を變むること極めて巧みあれば、誰ありて能く其の拿沙毘あるを認むる者あらざり。拿沙毘は四月十二日を以て始めて、インドルに往き、十九日に、デート及び世葉樹の相交はりて繁茂せる美しき谷を渡りて、スワリに至れり。コ、に、古代より遺存せる許多の斷塚、崩落あり。拿沙毘は此の荒廢なる古墟の中に、足を停めて、呼號せるに、一岸の下に、數百の亡人コ、カシコより露れ集まれり。是等の亡人の皆を英國兵の

追跡を遁れてコ、は隠れたる者として他日時至りて拿沙毘が一揮せば皆を喜び  
て先鋒は走せ到るべし

二十四日にはマルワの首府なるビルサ達せりコ、にも亦た幾多不逞の徒を  
集して其の合圖を約しつ二十七日にラジュール入り三十日には往ぬる歳將  
官ヒュー、ロースが土着兵と劇戦せる故跡に近きサウゴルの市に達せり拿沙毘は  
是に於て其兄バラオラオ及び従者カラガニと相會し復た相携へてアンナはゆき  
コ、其の會長を説ける後將にタンダトの巖居に再び歸らむと欲する途次ベ  
バルは暫らく足を停めり

ベバルの町の熱鬧して街上の采往頗る繁げれども拿沙毘兄弟は極めて巧み  
其姿を易へたれば曾て人の目を惹くことあらを優かよ街上をコ、カシコ巡覽す  
るうち拿沙毘はトある町の曲角にて忽ち其肩に觸るゝものあるを覺えり頭を回  
して之を見るよ一個のベンガル人ありて己れの背後に立てり熟視するよ是れ嘗  
て己れが部下に属せる者あり拿沙毘は目をもて其意を尋ぬるよベンガル人は此  
の如くに低語しはゆめり然れとも拿沙毘は冷然として聞かざる如く其面の筋一

本だに動かすことあらざりければ何人も此の兩個の問答に心づく者あらず  
ベンガル人「佐官萬妻カルカッタ府を發足せり」拿沙毘「今まイツコに在りや」  
「昨日ベナールスに在りたり」將さふイツコに赴かむとするや、「子パウルの  
境に」何の志きす所ありて「ソコに幾個月を消せむ爲め」シテ其後「孟  
買府に赴むくあり」

一聲の唳喟拿沙毘の口より洩れたり同時に一個の印度人群衆の間より顯われ出  
て来りて拿沙毘のホトリに立てり是れカラガニありき  
拿沙毘「直ちに往て今ま北方に赴むくの途中に在る萬妻に尾せよ汝何等か渠が  
爲めに用をあして渠の一行に加はるべし、若し事宜よらば汝の命を危ふくし  
ても渠が爲めに用を爲せ、渠がチルパッタの谷中に入りウツヤスの境を越ゆ  
るまで決して渠を離るゝ勿れウツヤスの境を越えたらむよ直ちに来り  
て余に其事を報せよ」

カラガニは微しく頷づけるのみ直ちに見えすあれり拿沙毘の號令に嚴明にして  
唯だ此の如きのみ而して十分間の後はカラガニは早やポバルの町を離れり

折りしもバラオラオは拿沙毘のホトリに乗りて「最早も發足の時あるべし」拿沙毘  
 毘「然り日出の前は我々の必ずタンダトの巖居に在らねばならず」バラオラオ「  
 いざ往かむ」  
 斯くて兩個の其の從へたる所のグンドワナ人幾個と共にポバルの町を出でたる  
 が午後八時及びては拿沙毘兄弟の皆も既に其の竊かき備へ置ける馬に跨り  
 幾多の衛卒と共に一サンポバルよりグンドワナに向ふの道を走せされり  
 既にしてタンダトの巖居に近づけるに始めて馬を駐めて暫らく休息せるがポ  
 バルを出で、よりコ、に至るまで未だ曾て一語をも交へざりし拿沙毘兄弟の  
 纒かふ其の口を開けり拿沙毘「萬葉がカルカッタ府を出で、孟買府に赴むかむと  
 するあり」バラオラオは叫びたり「若し孟買府に赴むかむの定め此のホトリ  
 を過ぎるならむ」拿沙毘「孟買府に赴せよの道の必ずグンドワナに至りて斯ゆ  
 べし」  
 拿沙毘の言の唯た此の如くありき然れどもバラオラオは既に其意を解せり斯く  
 て馬の再び走せて既にチルバッタの谷口を蔽へる密林の間に入り

是れ正さふ曉の五時ありき太陽の初光は漸やく東方の天を照らしそのり拿沙毘  
 等のコ、に至りて馬を下りつ馬の悉く兩個のグンドワナ人委ねて其のホトリ  
 なる村に率き去らしめつ渠等の一同にナツル川に入り去れり蓋し巖居に登  
 るに川の川の中を遊ばりあゆむこと良久しくせざるを得ざりしあり  
 四顧寂然たり晝間の雜響は未だ未だ夜間の靜黙猶ほ谷中を管領せり  
 突然響く一發の銃聲第二第三相續で發せるが忽ちよして吶喊の聲頭上より起れり  
 「ハルラー、ハルラー、進め、進め」  
 一個の士官五十個の英國兵を率めて正に巖居の絶頂に顯られ出でたり俯して拿  
 沙毘等を指さしつ、「銃撃、銃撃、一個も洩らし走らしむるおかれ」  
 拿沙毘兄弟を圍繞せるグンドワナ人は看る／＼三個五个斃れしが既にして復た  
 一齊に一團とまりて連なり斃れり  
 英國士官は今も巖居を下り乗りて「拿沙毘、拿沙毘」と呼ばよれるが聲に應じて  
 縦横に斃れたる印度人の中より一個の重傷を蒙むれる身材魁梧の意ありてスッ  
 ノと起りつ恐ろしき聲を放ちて「英國人殄滅」と叫べるが再びバタリと斃れて道

ちよ息絶えたり  
 士官の其のホトリに進みて左右を顧み「是も實に拿沙毘なる歟」と問ふより早く  
 二個の英國兵の聲を同くして「然り、實に拿沙毘なり」と答へたり此の二個の  
 首てカウソールに在り極めて世子の容貌を熟識せるものなりしあり士官「然  
 らば自餘の奴等を」と云へるまゝ、其の部下を率ゐて茂樹の間へ追ひ入りたり  
 今ま英國人が其の部下と共に茂樹の間へ見えぬおられるトタン忽ち一個の黒き影  
 ありて飄然と巖居の物蔭より顯れ出でたり  
 是れ即ち「知らぬ火」ありき  
 蓋し此の狂女子の知らず識らず前々英國士官と其の一隊の兵とをコ、一導たる  
 案内者とされるなり渠の前々谷中へ歸り来りて舊と知るタンダトの巖居のか  
 たよあのみゆけるが、コハソモ、平生無言にして哑者ありと信ぜられたる此の狂  
 女子の行くく且つ口中へ幾たびとなく「拿沙毘、拿沙毘」とツブやきををれり思  
 ふに何等か思議すへからざる感の其心母浮び来りて渠として此の大叛魁の名  
 を誦せしめしあり

此のをり恰も拿沙毘を索めてコ、に来りたる英國士官の之を聞て愕然とせり既  
 にして渠の直ちに其の部下へ命じ遙かアトより此の狂女子を覺られざるや、竊  
 か一之に尾せるなり斯くして一隊の兵は遂にタンダトの巖居へ達せり是れ果し  
 て拿沙毘が伏匿の所ありや否やを判すべからざれども兎に角に其兵を按排して  
 コ、へ歸り来る者を待ちかけたり待つこと一日にして今ま此の大叛魁をコ、に  
 獲るよ至りたり  
 孟買府の知事に拿沙毘を獲たることを飛報せる電信の次第に即ち是れありき斯  
 くて此の電信の直ちに印度全土に傳はりぬがれるを遂に五月二十六日のアウ  
 ランガバドの新聞紙に之を掲げて佐官萬巻に讀ましむるに至れるあり  
 既にして彼の狂女子の巖居を離れ幾々とナツツルの流に下り来れるが其の口中  
 には猶ほ断えず拿沙毘の名を繰返せり斯くて彼の屍骸の縦横は散亂せるホトリ  
 へ至れるとき嚮きよ英國士官が指示し二個の兵が承認せる彼の一個の屍骸のホ  
 トリに至りて止まりたり狂女子の彼の無限の怨を此世へ留め眼を睜れるまゝに  
 死したる恐ろしき顔を熟視せること良久しかりしが遂に頭と點じて静かふ身

を起し其のまゝ飄然立ち去りたり  
然れども此のときより以後漂の舌々母ひ拿沙毘の名を誦まるとありたり



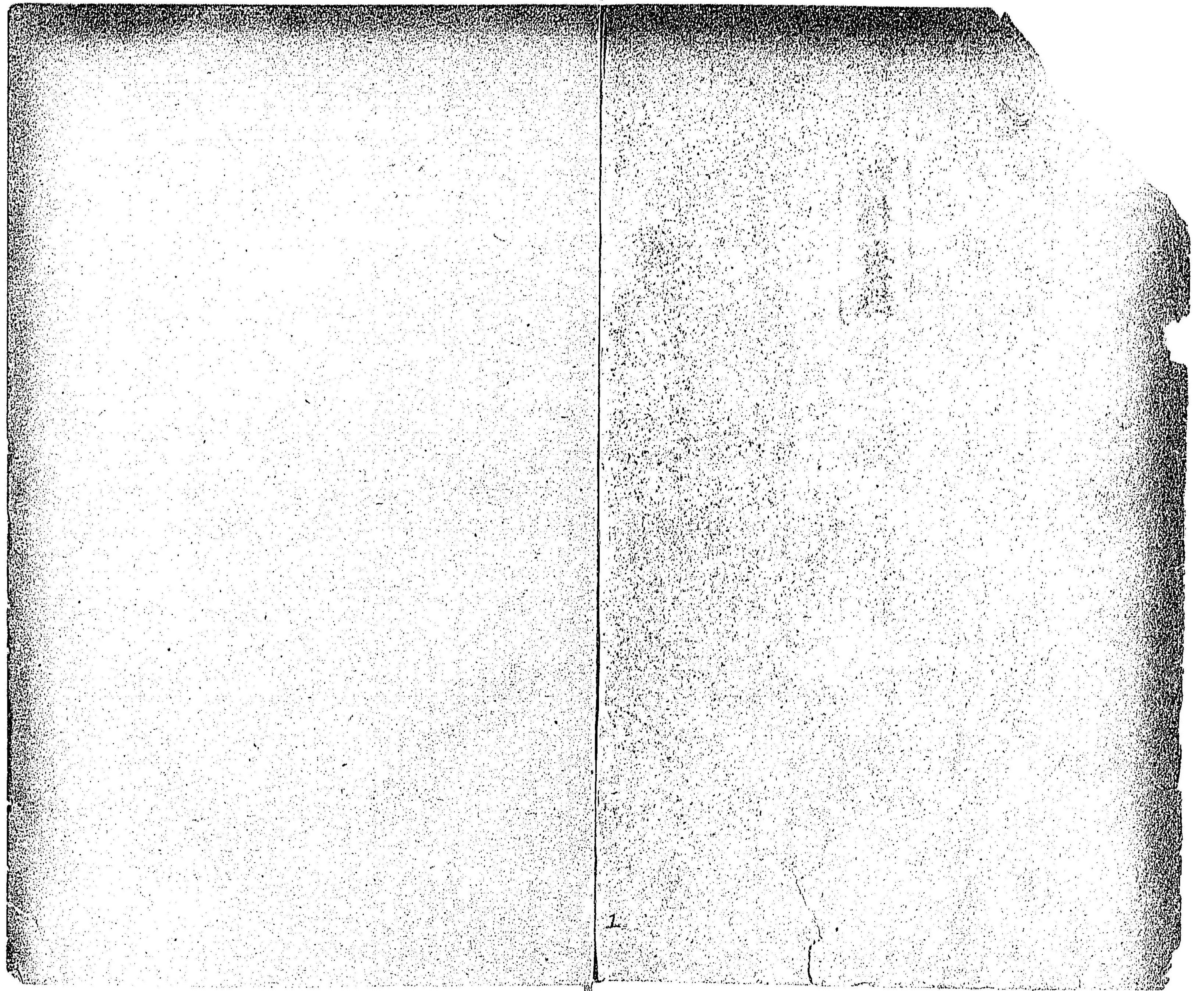
大 坂 魁 大 尾

明治廿三年九月廿日 昭行所存

日本橋通四丁目五番地

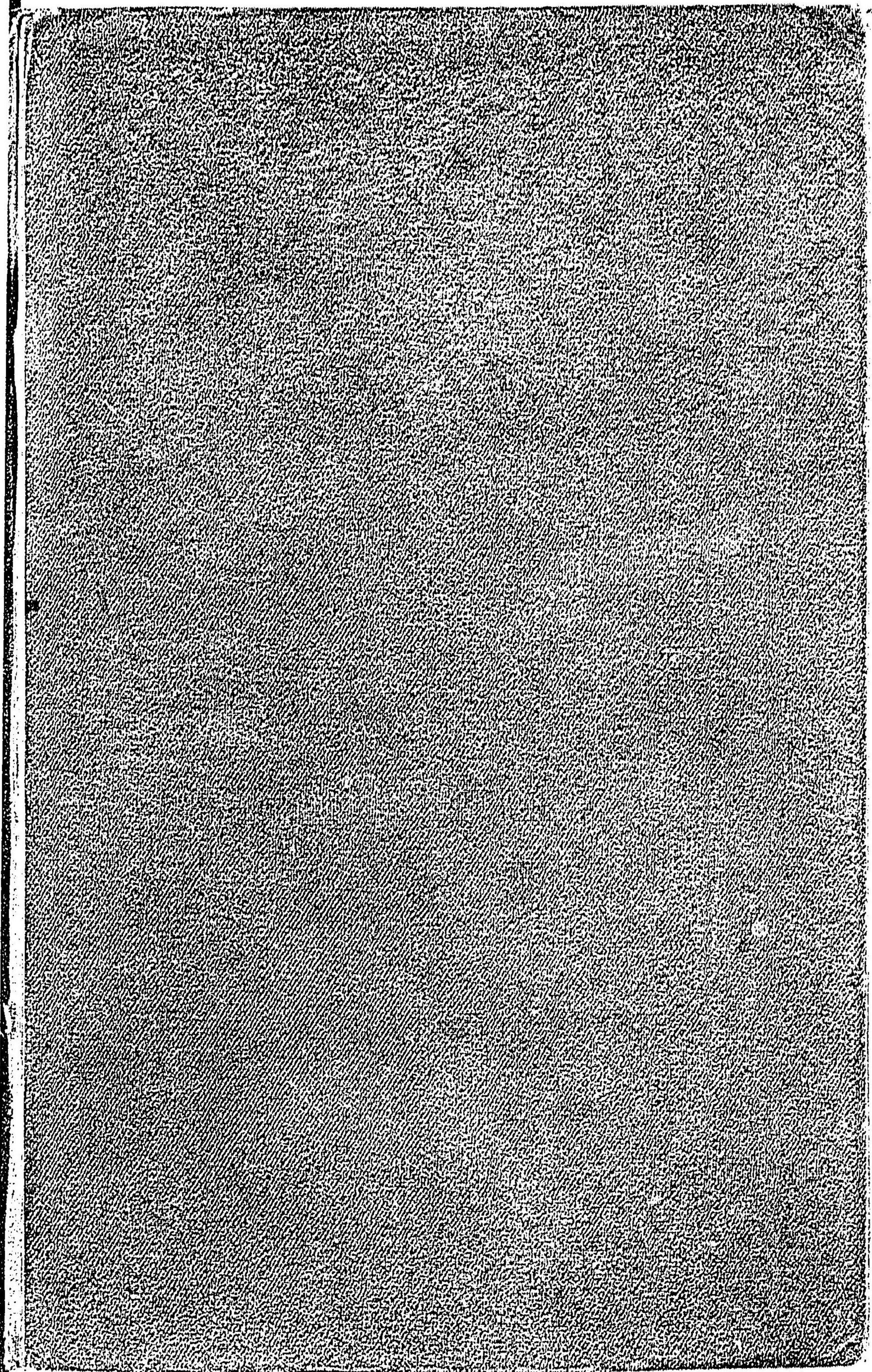
發行所 和 田 篤 太郎  
印刷者

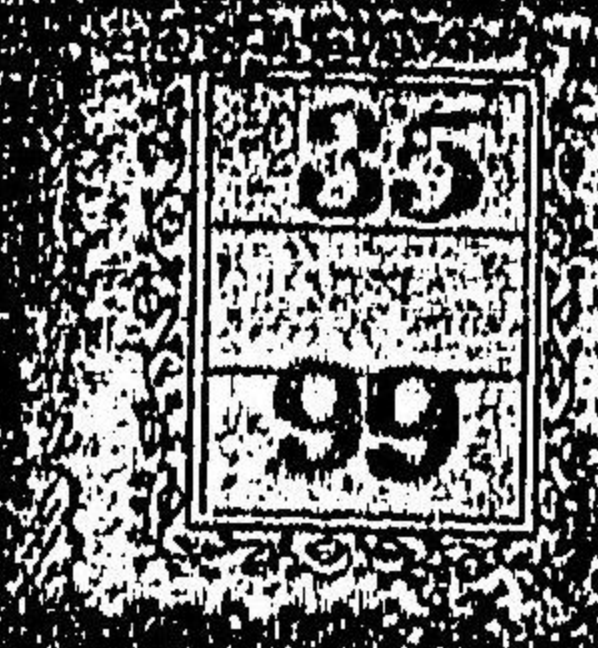
版權登錄





35  
99





310382-000-0

35-99

大叛魁 新小説

ジュール・ヴェルヌ 著

森田 思軒 訳

